

# 『茶飲友達』

監督・脚本：外山文治

出演：岡本玲、磯西真喜、海沼未羽、渡辺哲 ほか

2022年／日本／135分



公式サイト

各種配信サービスにて視聴可能

2025年10月3日より

DVD 販売・レンタル開始!

配給:イーチャイム

©2022茶飲友達フィルムパートナーズ

## 社会を旅する シネマ

きっと もっと 近くなる  
きっと もっと 知りたくなる

2013年、高齢者に売春の斡旋を行っていたクラブが摘発された。新聞に「茶飲友達、募集」という三行広告を出して会員を集め、約10年もの間、売春を仲介していた。摘発時には性を買う側の男性会員が約1,000人、性売る側の女性会員が約350人いた。男女共に平均年齢は60代、最高齢は80代だ。本作は実際にあったこの事件に着想を得て描かれた。

高齢者専門の売春クラブ「ティー・フレンド」に電話をかけてくるのは、どこか孤独を抱えた男性たちだ。妻から性行為を拒絶された。息子に施設に入れられ、面会に来てもらえていない。かつては会社で地位の高い役職を務めていたが、今は誰にも見向きされな。ティー・フレンドの代表である30歳前後のマナは、ティー・フレンドをそうした高齢者たちの「セーフティーネット」と呼ぶ。何歳になっても、誰かに大切にされたり、誰かを大切にできる時間が、生きる希望になる一。

それは相手を務める60歳以上の「ティー・ガールズ」たちも同様だ。半額のおにぎりを万引きして捕まりそうになったところをマナに助けられ、ティー・ガールズに加わることになった松子は、生涯独身で、親の介護生活の後、生きる意味を見失っていた。だが客の男性たちの「欠けているもの」に寄り添うのがうまく、あっという間に指名率ナンバー3になる。しかし松子は「ほしいものは特にな」と、稼いだお金で児童養護施設に食べ物寄付

## 高齢者の孤独を埋め合う 売春クラブ

アーヤ藍

するなど、お金を稼ぐだけではないやりがいを感じているのが伝わってくる。

「ここに来る人はみんな自分の価値を誰かに認めてほしいだけなんだよ」とマナは言う。マナ自身もシングル家庭育ちで、母親と折り合いが悪く、かつては風俗で生計を立てていた。家族との確執を抱えるマナは、ティー・ガールズや運営を支える居場所のない若者たちを「家族」と呼び、「みんながいつでも帰ってこられるお家をつくりたい」と語る。

だが、この「家族」は旧来的であり依存的だ。ティー・ガールズは、いわばケア労働ともいえる売春をし、ティー・フレンドに貢献することで家族として認められる。ほかに仕事の選択肢も逃げ場もない。「誰かに認められる価値」は危うい。そんな家族の歪さが終盤露呈していく。

実際の事件では70代男性が経営者だったが、本作はマナをはじめ若者たちの生きづらさも織りこまれている。それによって気づかされるのは、高齢者の孤独は若い頃<sup>いづつ</sup>の選択肢の幅にも影響されるのではないかということだ。若い頃に挑戦し、失敗や孤独を経験すること。自分で自分の価値を感じられるような仕事を見つけること。趣味など家族や仕事以外の居場所を見つける金銭や時間のゆとりをもつこと。ティー・ガールズの女性たちもそうした経験を経ることができるとすれば、違う道を選べたのではないだろうか。



アーヤあい：映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題に関わる映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』(春眠舎)。

